

# 25年前の夏、 中大生だった「彼」の夏休み

思わず、寝ぼけ眼をこする。

《北朝鮮、地村夫妻・蓮池夫妻の子供の帰国を打診。韓国紙“大韓毎日”が報ず。日本政府は否定……》

柏崎へ向かう上越線の車中、そのテロップは流れた。

78年7月31日——25年前の夏、当時中央大学法学部3年生だった蓮池薫さんは、新潟県柏崎の海岸から北朝鮮に拉致された。そして毎夏、私たち「北朝鮮に拉致された中大生を救う会」は、地元で開かれる「救出を誓う集い」に参加する。現在、蓮池さん夫妻は帰国されているが、まだお子さんが北朝鮮に残されている。だから今年は、「お子さんを取り戻す集い」。その当日の7月31日、冒頭のニュースが飛びこんできたのは、列車が三国峠を越えて、ちょうど新潟に入る頃だった。

北朝鮮に拉致された中大生を救う会 代表幹事 渡部一実（法学部学生）

## 市民活動支援課、蓮池薫

信越本線に揺られ、柏崎に着く。海からの風が心地良い。まず、彼、蓮池薫先輩が勤務する柏崎市役所に向かう。

市役所で働く姿は、表向き他の職員と変わらない。いや、働くしかないのだろう。じっとしていると想いが募る。帰国10カ月、いまだ海の向こうに残された子供への想いを振り切ろうと、懸命に働く。

「久しぶり。遠いところわざわざありがとうございます」  
仕事を抜け出して来てくれた彼は、元気そうだ。

「お仕事中、すみません」  
「気にしないでよ。東京より涼しいでしょ？」

首からかけた職員章が揺れる。現在、「市民活動支援課」の職員だ。

「大学は今、夏休みだよ。みんな何してるの？ やっぱバイト？」

僕はビル掃除をやったよ、時給700円。バブル前だが、ずいぶん高い。今も似たようなものである。

「僕の頃、大学はロククアウトで試験ができなかった。だから、試験の代わりにレポート。試験よりは楽だったな」

僕ら現役学生と談笑しながら、彼の失われた夏休みを取り戻すかのよう。そう、彼はまさに、多くの学生がアルバイト、自動車免許、そして課題レポートに追われている夏休みに、異国に拉致されたのだ。

「大韓毎日」報道、NPO……  
「揺さぶりは予想の範囲」

先程のニュースを巡り、自然に、お子さんの帰国の話になった。

「大韓毎日の報道はどうなんだろうね？ 会議中に兄貴から電話があつて、びつくりしたよ」

「（「帰国を打診」は）揺さぶりだと思えますよ。本当に返す気なら、政府を通して公式にやるはずですから。あんまり気にしないほうが……」

「大丈夫、（このような事態は）予想してた範囲だから。とにかく、はっきりした内容が分かってからの話だ

ね」

NPOの奇々怪々な動きもあった。しかし動じる様子はない。かといって、無理に強がる様子もない。昨年、「日本で子供を待つ」と決断したその勇気が、自然に伝わる(実際は、「帰国を打診した」ではなく、NPO事務局長を介して「子供からの手紙と写真が届いた」ということだったのだが。露骨な「揺さぶり」である)。

「僕は今日の集会には出られないけど、よろしくね。(集会の)時間までウチでゆつくりしていつてよ。今、タクシー呼ぶからさ」。プッシュホンを迷いなく押す。電話番号は暗記している。そんな姿はもう、完全に一職員だ。

「また、みんな遊びに来なよ」。温かい言葉と共に彼は、新しい職場となった市役所の玄関まで見送ってくれた。

## 中断した夏休み 再び増えだしたアルバム

蓮池家に到着。玄関に警護車輛、警察官2人。24時間体制だそうだ。

拉致事件が未解決であることを、痛々しく物語る。ご両親と久々の面会。居間には彼のアルバムがある。野球部でキャプテンの中学時代、坊主頭の薫少年。高校時代の、たった5人の演劇部。そして、中央大学でのキャンパスライフ。当時流行った長髪、

で途切れていた。

しかし今は、45歳となった彼のアルバムがある。

「帰国」

と題された、昨年帰国して以降のアルバムだ。羽田のタラップを降り、24年ぶりに祖国の土を踏む、緊張し



柏崎市職員として、25年めの夏を迎えた蓮池薫さん＝柏崎市役所で

とりたての自動車免許、そして書きかけのレポート……25年前、彼は確かに夏休みを謳歌していた。我々と同じ中大生として。「拉致」というテロによって、不幸にもその夏休みは中断されてしまったのだ。

昨年まで、アルバムは、大学時代

た表情。四半世紀ぶりに家族との食卓を囲む、なごみ。幼なじみと久々に、「バッテリー」を組む笑顔。……アルバムは、「あの夏」以来再び、冊数を増え始めた。長らく止まっていた「時」が、再び動き出したのである。

「白門はいつでも開けて……」

柏崎中央海岸。彼は今でも恐ろしくて近寄ることもできないという、あの忌まわしい拉致現場である。海岸での集会不参加は、まだ心が癒えない、そういう事情がある。

〈アベック失踪事案。ご存知の方は警察まで〉。昨年見かけた、拉致事件に対して情報提供を呼びかける看板は、今年は撤去されていた。彼の帰国を受けてのことだろう。

しかし、彼が手紙(前ページ)で書いているように、拉致事件はまだ終わらない。子供が帰国し、彼が家族揃って暮らせる時まで。だからこそ、またこの海岸に人々が集う。

今年の「集い」は、海に向こうに残されている彼の子供を、「取り戻す集い」となった。31日、風の強い海岸に、100人もの人々が集った。水着のままの「見物客」もいる。柏崎市長、新潟県副知事、地元選出国會議員と来賓が勢ぞろいし、マスコ

## 学長メッセージ

本学の法学部3年生であった蓮池薫さんが、実家に帰省中に北朝鮮に拉致されてから、25年目の夏を迎えました。

昨年9月の小泉首相の北朝鮮訪問により、消息が不明であった彼の生存が確認され、奥様の祐木子さんと子どもも解放され、帰国の途につきました。

しかし、悲しいことに帰国から1年が経とうとしているのに、蓮池さんのご家族が揃って、日本で暮らすことは実現していません。

しかも、お子さんの安否情報も公にされることがなく、親御さんとして、蓮池さんご夫妻の心はいかばかりかと推察いたします。

今、日本では様々な事件が発生し、世間が注目する話題に事欠きません。しかし、事件から四半世紀経った今、前途有望な若者の人生を台無しにした、この事件のことを忘れてはなりません。

しかも、この拉致事件はいまもって解決していません。一刻も早く、他のご家族ともども蓮池さんご夫妻にも一家揃った幸せな日々が訪れることをお祈りしております。

そして最後に、蓮池さんが望むなら大学に復帰し、中断した学業を再会してください。私たちは歓迎します。

白門は君を迎えるため、いつでも開けております。

2003年7月30日

中央大学学長 角田邦重（署名）



蓮池さんへあてた角田邦重学長のメッセージ

右下写真＝蓮池薫さんと救う会のメンバー

ミ各局の中継車が所狭しと並ぶ。昨年の「集い」は彼の両親、同級生、そして我々で、参加者は12人にすぎなかった。事態の進展と、マスコミ・政治家の如才なさも物語っている。



中大学長からのメッセージを読あげた。彼の生死すら分からなかった昨年、鈴木康司学長(当時)のメッセージは「蓮池君が無事に帰国されることを祈っております」とあった。

彼が子供を残したまま帰国した今年、角田邦重学長は「一家揃って暮らせる日を祈っております」としている。彼が一家揃って幸せに暮

らせるまで、私たちは支援を続ける。海に向かって、拳を挙げる。「蓮池さんの子供を返せ!」と。金正日に届け。

「白門はいつでも開けております」。角田学長のメッセージの最後は、こう締めくくられている。彼の復学いかに関わらず、中大の仲間である、との大学の意思がこの言葉にこめられていよう。

私たちが、母校を同じくする一後輩として、彼の家族の早期帰国を願う。来夏、24時間体制の警護から解放された彼が、この海岸で子供達と海水浴をする、そんな光景を思い描く。そのために私たちは今までと変わることなく支援活動を続ける。

25年前の夏、中大生だった「彼の夏休み」。

それが中断してしまった海岸で、そんな誓いをした。

× ×

「北朝鮮に拉致された中大生を救う会」ホームページ

<http://www.geocities.co.jp/WallStreet/Stock/2416/>